三重大学高等教育研究　2018，第24号，47-54頁

【論　文】

ディスカッション授業による大学生と留学生の異文化理解†

福岡 昌子*
*三重大学地域人材教育開発機構

本稿は，2016・2017 年度前期に実施した三重大学教養教育科目『留学生と学ぶ日本』授業の実践報告である．大学生と留学生が日本文化と日本社会について，様々なテーマに基づくディスカッション授業を通して異文化交流を行った．日本人学生と留学生は，日頃大学生活の中では意見を述べ合う機会も少ないが，本授業を通してそれぞれの視点で日本文化と日本社会について共に考え意見交換ができ，双方の異文化理解にとてもいい機会となった．

キーワード：ディスカッション，異文化理解，日本人学生，留学生，日本文化と日本社会

1.　はじめに

近年，価値観の異なるグローバル社会の中で，協力し合って 1 つのことを解決していこうとする姿勢やそのためのコミュニケーション能力は，大学教育において早急に育成されるべき能力の一つであると思われる．

コミュニケーション能力の育成のためには，「対象文化での適応面，言語運用面といった社会活動面も包括した総合的な学習が重要」（正宗 1999）である．日本語教育の日本事情教育の分野では，異文化理解の向上，学習項目の運用・定着，口頭表現力の向上等を目的として，日本語でのディスカッションが授業に取り入れられてきた．留学生だけではなく日本人学生も対象として加えた混合クラスによる授業の実践が行われるようになり，日本人・外国人のカテゴリー化が顕在するものの，互いの言語運用能力や相互理解が促進したという成果も報告されてきた（徳井 1997，杉原 2005）．

本学国際交流センターでも，日本人学生と留学生が共に日本の社会や文化について学び討論する授業が開講されてきた（花見 2006）．2016 年度より組織改革により教員が異動した地域人材教育開発機構においても，継続授業として実施されている．本稿では，2016 年度前期および 2017 年度前期に実施された三重大学教養教育科目『留学生と学ぶ日本』（＝国際交流センター科目『上級総合日本語 2A』）の実践報告を行う．

本授業の目標は，ⅰ）異文化の視点を尊重できるようになる．ⅱ）日本社会と日本文化について，異文化の視点で物事を理解し考えられるようになる．ⅲ）日本社会と日本文化について観察力を磨き，自分の考えをまとめて発表する能力を養う．ⅳ）日本人学生と留学生がディスカッションを通して交流を図る，の４点である．

本稿では，2 では授業シラバスと授業運営，ディスカッション授業の進め方，3 ではディスカッションのテーマの決め方やディスカッションを進める際の心構えと注意点，ディスカッションの模擬体験授業について述べ，本授業の実践報告を行う．そして，2 年にわたる授業実践や授業アンケートを通して，本授業の意義および今後の授業運営の課題，異文化理解の指導のあり方について考える．

2.　授業シラバスと授業運営，ディスカッション授業の進め方

2.1.　授業シラバス

表1．2016 年度前期・2017 年度前期「留学生と学ぶ日本（教養教育単位認定科目）（＝国際交流センター上級総合日本語2A）」の授業シラバス

第 1 回	オリエンテーション、ディスカッションテーマ、討論の姿勢・進め方、座長グループの役割
第 2 回	討論の模擬体験１、討論の進め方
第 3 回	討論の模擬体験２、討論の進め方
第 4 回	座長グループ決め、グループによる企画・検討、テーマの検討
第 5 回	座長グループによる企画・検討、ディスカッション導入内容の検討、テーマの提出
第 6 回	座長グループ主導によるディスカッション１
第 7 回	座長グループ主導によるディスカッション２
第 8 回	座長グループ主導によるディスカッション３
第 9 回	座長グループ主導によるディスカッション４
第１０回	座長グループ主導によるディスカッション５
第１１回	座長グループ主導によるディスカッション６
第１２回	座長グループ主導によるディスカッション７
第１３回	座長グループ主導によるディスカッション８
第１４回	座長グループ主導によるディスカッション９
第１５回	座長グループ主導によるディスカッション１０
第１６回	レポートの提出

2.2.　本授業におけるディスカッションの進め方（オリエンテーション，座長グループ主導のディスカッション）

各座長グループ主導によるディスカッションが実施されるまでに，下記のように，オリエンテーション，座長グループ内の役割説明，ディスカッションテーマの決め方，ディスカッションの方法，2 回のディスカッションの模擬体験授業，座長グループによるディスカション導入時における資料作成方法について説明を行った．

2016 年度前期は，日本人学生 13 名，学部留学生 4 名，交換留学生 18 名，合計 35 名の参加があった．2017 年度前期は，日本人学生 12 名，学部留学生 3 名，交換留学生 22 名，合計 37 名の授業参加があった．両年度の出身国別人数では，次の通りである．

2016 年度前期：イギリス 1 名，スウェーデン 1 名，セルビア 1 名，ドイツ 1 名，ベトナム 2 名，韓国 3 名，中国 13 名，日本 13 名．

2017 年度前期：スウェーデン 1 名，タイ 3 名，ドイツ 1 名，フランス 3 名，韓国 5 名，台湾 1 名，中国 11 名，日本 12 名．

授業終了時に，①授業目標を達成できたと思うか，②座長として十分に役割を果たせたか，③毎回のディスカッションでは参加メンバーとしてその役割を果たせたか，を尋ねるアンケートを実施した（「5．授業アンケートの結果」参照）．

(1) 第 1 回～第 16 回の授業運営（表 1 参照）

①第 1 回：自己紹介，オリエンテーション，座長グループ内の役割説明，評価方法について

②第 2 回～第 3 回：ディスカッションの模擬体験授業 1, 2（「4．ディスカッションの模擬体験授業」参照）

③第 4 回～第 5 回：自分が所属する座長グループの決定，座長グループの担当日の決定，テーマ(トピック)の検討，ディスカッション導入資料の検討および作成など．

④第 6 回～第 15 回：10 の座長グループ主導によるディスカッション(合計 10 回)

⑤第 16 回：最終回　レポートの提出

(2) 1 回の授業（90 分）の流れ：第 6 回～第 15 回

①16:20～16:25：自分のディスカッション席に座る．毎回自分が所属するグループが異なるため，色別テーブル(A：緑，B：ピンク，C：黄，D：青)から自分の名札を探す．（座長グループは担当日には議論に入らない）

②16:25～16:50：座長グループは，ディスカッションテーマを提示し，議論する上で必要だと考える情報を，パワーポイントや資料で説明する．

③16:50～17:20：A 緑，B ピンク，C 黄，D 青グループで，座長グループが出したディスカッションテーマについて議論し，自分たちが出した結論とその根拠についてパワーポイントでまとめる．

④17:20～17:40：各グループ代表が約 3 分～5 分，発表する．毎回同じ人がパワーポイントによる発表者とならずに，全員が最低 2 回は発表者となる．

＊各グループ内の役割分担(例)：司会・進行 1 人，グループの結論発表者 2 人，パワーポイント作成者 4 人，記録者 1 人（各グループ参加者の氏名，役割の記録）．

⑤17:40～17:50：A・B・C・D のグループで，どの発表がよかったか，各座長が採点表に記入し，座長グループの間で 1 位，2 位，3 位，4 位を決めて発表する．最後に，教員から授業のまとめを行い，連絡事項を伝える．

(3) 座長グループ内の役割

①役割：座長グループは，座長グループが選んだディスカッションテーマの導入資料の作成を行い，当日は司会を担当し進行係となる．最後に，各グループのディスカッションの発表内容やプレゼンテーションを評価する．

②導入資料の作成においては，ディスカッションテーマにふさわしい資料を準備する．十分でなくてもディスカッションに入りやすいテーマや資料を選ぶ．動画などの視聴覚資料も適宜使用する．

③座長グループ担当当日は，司会者席側のテーブルに座る．座長グループは，ディスカッションテーマについて発表し，議論する上で必要だと思われる情報を，約 20 分間パワーポイントで説明する．

④各グループの評価は公平に行い，最後に，1 位，2 位，3 位，4 位を発表する．同位のグループがあってもよい．教員はその評価には，オブザーバーとして参加する．

(4) 評価方法

①授業評価：出席率 10%，口頭発表 50%，期末レポート 40%

②口頭発表：毎回自分が所属するグループのプレゼンテーションによる評価結果は，1 位が 5 点，2 位が 4 点，3 位が 3 点，4 位が 2 点とする．順位が同じならば同点となり，合計 5 点×10 回＝50 点とし，10 回の総合点が各自の口頭発表の成績となる．（当日欠席すると，配点は 0 点となるため，欠席が多いと総合点が悪くなる）

③期末レポート：「各自が所属した座長グループのテーマについて，自分が考えるテーマの結論とその根拠について述べる．」

3. ディスカッションのテーマの決め方やディスカッションを進める際の心構えと注意点

3.1. ディスカッションのテーマの決め方など

(1) テーマ(トピック)の選択例

議論しやすいテーマを選ぶように促した．表 2 に示したのが，2016 年前期および 2017 前期の学生が選んだディスカッションのテーマである．

表2. 2016 年 2017 前期のディスカッションのテーマ

2016 度前期： 「同性婚を認めるか」，「幸せとは何か」，「外国観光客がもたらした影響を巡って」，「留学生はどうしたら日本人と仲良くなれるか」，「難民対策について」，「死刑制度を廃止すべきか否か」，「どんな朝食が理想的か」，「受験教育は廃止すべきか」，「世界の映画と日本の映画の違い」，「三重の観光地以外に外国人を呼び込むためにはどうしたらよいか」
2017 年度前期： 「何のために同棲するのか」，「日本の特別な愛の形について」，「なぜシングルマザーの生活は厳しいのか」，「これから世界で流行りそうな民族衣装ファッションとは」，「タトゥーについてどう思うか」，「整形についてどう思うか」，「代理出産を認めるべきか」，「一人旅のメリット・デメリット」，「なぜ日本の漫画・アニメ産業は下降傾向にあるのか」

(2) 異文化視点の尊重

日本の社会や文化について日本人学生は留学生に説明し，留学生はそれぞれの文化の視点から意見を出し合うこと，そして，日本人学生と留学生が異文化の視点を尊重しながら，両者協力し合って結論を出すことに努めるよう，オリエンテーション時に説明を行った．

3.2. ディスカッションを進める際の心構えと注意点

オリエンテーションでは，ディスカッションの進めるにあたって，一般的な心構えと注意点について説明し指導した[1)]．主に毎回ディスカッションメンバーの異なるため，各グループ内において,司会者や参加者としてどのような点に注意すべきか，ディスカッションに参加する際の基本姿勢としてどんな点が重要だと思われるかについて，授業を実施する前に下記のように説明を行った．

(1) 司会者としての役割

①論点を明確にする．

・司会者は全ての発言や質問を取り上げてはいけない．発言や質問の中には現在の論点からはずれたものがあれば，異なった論点として後で取り上げるようにする．

・誰かが論点からずれた発言をした直後，それに対する意見を別の人が返した時は，司会者は話を元に戻すように努める．

②参加者に平等に発言の機会を与える．

・参加者の中にはよく話す人と，意見を持っていても自分からはあまり発言しない人がいる場合，司会者は全体に目を配り，参加者に平等に発言の機会を与えるようにする．

③場面に応じた適切な質問をする．

・議論が混乱した時や意見が出ない時は，再び議論を活性化させるために，司会者は現在の論点を踏まえた質問をしてみる．自分の意見をまとめられない人には簡単な質問をすることで，議論に参加できるようになる．

(2) 参加者としての役割

①現在の論点はなにか，常に意識する．

・司会だけではなく，参加者も現在の論点は何か，常に意識する必要がある．

②発言の種類を意識する

・自分の発言が「賛成意見」，「反対意見」，「情報提供」，「質問」のいずれなのかを意識して発言を行う．

③発言は相手の人格に対してではなく，意見に対して行う．

・議論は本来感情を持ち込むべきものではない．「反対意見」も「質問」も，お互いの意見に向けられるものであるとの自覚を持つ．

④意見が分かれる時には「どちらの意見にも一理有る」との自覚を持つ．

・議論の時，以下のように常に「正義」と「悪」の二者対立構造に当てはめて考えないようにする．実際の議論では，多くの場合「どちらも正しい」ことを議論しているので，「自分は正義」「相手は悪」と単純化して考えないようにする．

⑤他の参加者に敬意を払う．

・10 人参加者がいれば 10 通りの立場があり，10 通りの視点があり，10 通りの考え方がある．他の参加者の立場や視点，考え方の中には自分が知らなかった点もあるため，他の参加者に敬意を払いながら議論を進め，実りある議論にする．

4. ディスカッションの模擬体験授業

10 回の学生の座長グループによるディスカッションを行う前に，受講者が 1 回のディスカッションの流れがわかるように，教師主導によるディスカッションの模擬体

験授業を行った．1回目は誰でも参加できるテーマを，2回目はグループでしっかり議論できる身近なテーマを選び実施した．

4.1.　模擬授業１．「次に世界でヒットする日本の食べ物は？－どうしたら世界でヒットするか－」

まず，日本テレビ（2015）「世界一受けたい授業－外国人が好きな日本の食べ物ランキング」から，3位，7位，12位，16位を全員で考えさせ，日本食の良さを検討させる．また，日本貿易振興機構（2013）「日本食品に対する海外消費者意識アンケート調査」において，中国，香港，台湾，韓国，米国，フランス，イタリア(2,800人）を対象に，自国を除く好きな外国料理のアンケート調査を実施した結果から，ランキングの3位と6位はどこの国の料理か，その選ばれた理由について考えさせた．

次に，カリフォルニアロールが世界で寿司ブームのきっかけとなった要因について説明した．一般財団法人日本総合研究所海外における食文化の戦略的調査検討会（2015）「日本食・食文化魅力発信プロジェクト－海外における食文化の戦略的調査－」から，日本政府がどのように日本食やその食文化を海外に普及させようとしているか幾つかの事業例を紹介した．そして，「次に世界でヒットする日本の食べ物は何か」を考えさせた．授業では例として「みたらし団子」を挙げ，その歴史，材料，作り方を紹介し，その根拠について説明した．最後に，学生はグループでディスカッションを行い，「次に世界でヒットする日本の食べ物とその根拠，海外へ普及させる方法」について考え，パワーポイントにまとめ，発表させた．

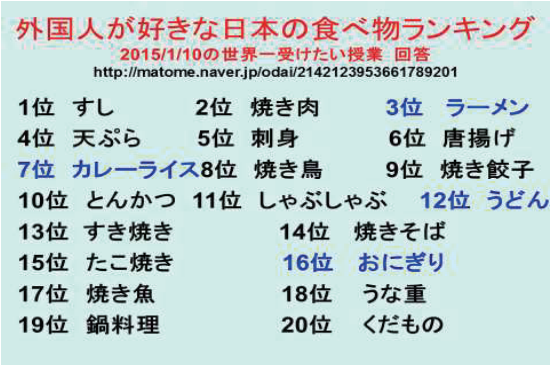

図1.『外国人が好きな日本の食べ物ランキング』（日本テレビ(2015)「世界一受けたい授業　2015年1月10日放送」）

4.2.　模擬授業2.　『三重大学生が考える防災（地震津波）対策：大学生として何ができるか」

ディスカッションの模擬体験授業の2回目として，「三重大学生が考える防災（地震津波）対策：大学生として何ができるか」を選んだ．

まず，本学キャンパスの地理的特徴について紹介した．本学は，三重県津市の伊勢湾に面した海岸に隣接しており，津波の到来時には，高台への避難が難しく，キャンパス内の建物高層部への避難と一定期間の孤立が予測される．南海トラフでマグニチュード9.0の地震が発生した場合，どのようなことが起こるとされているか説明した．次に，「三重大学津波避難基本計画」（2012）に基づき，地震が発生し津波が来た場合どのように避難するか基本計画を紹介した．その上で，「三重大学津波避難基本計画」に従って作成された三重大学邦楽部（2012）「三重大学邦楽部地震避難マニュアル」についても紹介した．そして，具体的な避難方法について避難所としてのビル名や公園名を出しながら避難方法について説明した．最後に，グループに分かれて三重大生が考える防災（地震津波）対策について，大学生として何ができるか，各グループで考えさせパワーポイントで発表させた．

このような教師主導によるディスカッションの模擬体験を行うことで，座長グループによるディスカッション導入のための資料作成やディスカッションの進行方法，各グループの評価方法，また，ABCDの各グループによるディスカッションへの参加方法やグループの討議結果を示す口頭発表の方法について理解させた．

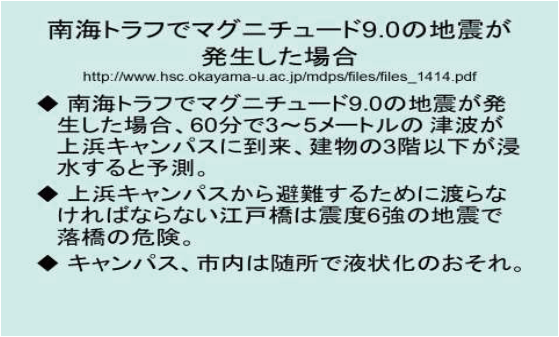

図2.『南海トラフでマグニチュード9.0の地震が発生した場合』（有限会社 国大協サービス(2014)）

5.　授業アンケートの結果

2.2.で述べたように，授業終了時に本授業に対するアンケートを行った．アンケート回収数は，2016年度は27，2017年度は23だった．

5.1.　授業目標の達成度

2016 年度では，次のような結果だった．「異文化の視点を尊重できるようになった」（100%），「日本社会と日本文化について異文化の視点で物事を理解し，考えられるようになった」（100%），「日本社会と日本文化について観察力を磨き，自分の意見をまとめて言えるようになった」（100%），「日本人学生と留学生がディスカッションを通して交流できてよかった」（96%），「将来ディスカッションをする機会があったときに，今回の経験が役に立ちそうだ」（96%）．2017 年度は全ての項目が 100%だった．

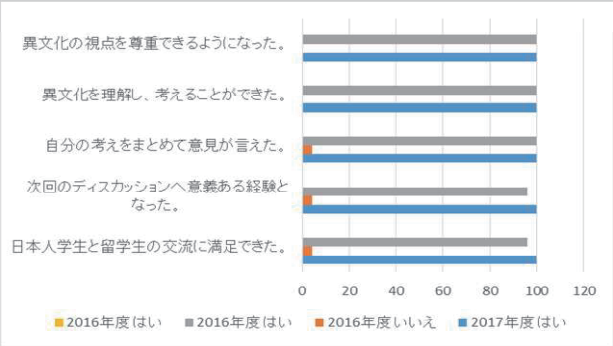

図3. 授業目標の達成度

5.2.　座長グループとしての役割

次に，座長グループとしての役割はどうだったか尋ねた．2016 年度も 2017 年度も，事前準備が特定の人の負担となってはおらず，全員が協力して準備していたことがわかった．ディスカッションのテーマ選びやその導入時の説明内容や方法についても，適切だったと判断していた．ただし，座長の各グループの採点方法についての基準が，座長グループに委ねられていた部分が大きいため，やや採点の基準が不統一だったとの反省点が両年度とも少し高かった（2016 年度 44%，2017 年度 36%）．

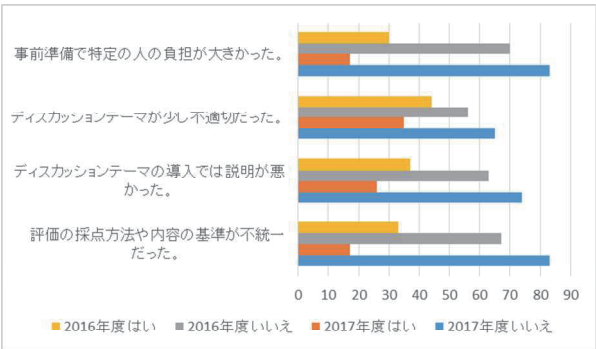

図4. 座長としての役割

5.3.　毎回のディスカッションの参加態度について

各グループ内のディスカッションにおける反省事項では，両年度ともに「毎回グループのメンバーが違うので，面白かった」，「自分のグループの結論をまとめる作業を行う際に，パワーポイントの作成や発表などに自分は貢献できた」と考える参加者が多かった．しかし，「毎回積極的にディスカッションに入ることができたか」という質問では，毎回積極的に加わることができなかったとの反省点があった（2016 年度 19%，2017 年度 23%）．「グループ内の結論を出す際に，自分の意見が大きく貢献できたか」と言う質問では，やや自信がない結果が見られた（2016 年度 15%，2017 年度 32%）．

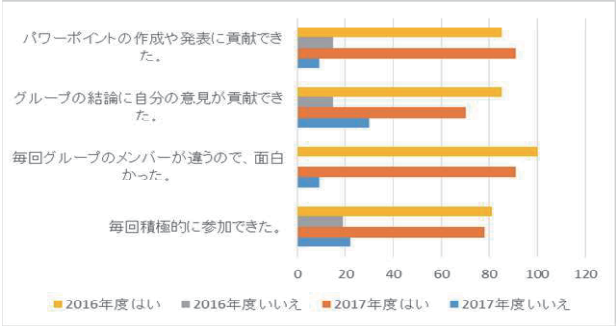

図5. 各グループのディスカッション態度

5.4.　本授業の運営について－アンケートから－

本授業の運営方法および受講した感想について，自由記述形式でアンケートを行った．

図6. ディスカッション及び発表風景

表3. 本授業の運営方法および感想について
－自由記述－

2016年度
・留学生の意見が聞けて，また，交流ができてとてもよかった． ・発表の機会をなるべく留学生にしてあげた方が練習になると思う． ・直すべき点もあるが，適切なシステムだと思った． ・楽しい授業だった． ・議論結果の評価の基準は曖昧だったが，個人的には順位より過程が大事だと思う．

2017年度
・多様なテーマをディスカッションして多くのことがわかった． ・毎回グループのメンバーが違うので，面白くて視野も広がった． ・日本人の学生たちと一緒に話すのは日本語レベルを上げることができると思う． ・模擬ディスカッション練習は大切だと思った．この模擬練習を通じてやり方がわかった． ・重いテーマが多かったので，時にしんどいなあと思うこともあった． ・日本人学生グループ分けに偏りがあったが，すごく楽しかった． ・授業の内容がとても面白かった． ・授業が面白く，この授業を受けてよかった． ・出席の評価を20%にした方がいいと思う． ・社会的テーマのディスカッションは専門知識が少ないので，積極的に加われなかった．

5.5.　2017年度前期：印象的だった座長グループ上位3位について

2017年度前期には別のアンケートも実施した．自分が所属した座長グループ以外で，印象的だった座長グループ上位3位とその理由について尋ねた．

1位が同点のグループが2グループ，2位が同点のグループが3グループ，3位が同点のグループが2グループあった．表4に，合計7つの座長グループのなぜ印象に残ったのかその理由についてまとめた．参加者に関心のあったテーマやディスカッションに参加しやすいテーマだった場合に，積極的にディスカッションに参加でき，印象も強いことがわかった．

表4. 2017年度前期印象的だった座長グループ
（1位～3位）

1位	タトゥーについてどう思うか．	・タトゥーについて様々な意見が出て，やはり東洋と西洋と違っているのがわかった． ・タトゥーのことについて，座長グループが詳しく調べていた． ・国によってタトゥーの捉え方が違って色々な意見が出た． ・アジアと欧州で大きく考え方がわかれるテーマだったので面白かった． ・自分があまり知らないことだったので，面白かった．
	一人旅のメリット・デメリット	・誰でも一人旅が怖いけど，ディスカッションで一人旅ができるような気がしてきた． ・色々な観光地も紹介してもらって楽しかった． ・一人旅の経験も聞けたので，面白かった． ・一人旅をしたことはあるが，深く考えたことがなかったので，面白かった． ・テーマが話しやすいし，みんなのＰＰＴもよかった．
2位	日本の特別な愛の形	・新しい知識の提供もあり，面白かった． ・珍しいテーマで面白かった． ・日本にいるからわからなかったが，外国人からすると日本の愛の形が変わっているように思われていて，不思議だった． ・日本だけにしかない性の産業があることを知らなった． ・風俗が日本の文化と知って驚いた． ・この前ちょうどレンタル彼女というドラマを見たばかりだったので印象的だった．各国の特別の愛の形がわかってきた．
	なぜシングルマザーの生活は厳しいのか．	・シングルマザーについて理解できてよかった． ・シングルマザーの状況は厳しいことを知り支えたいと思った． ・色々な国の異なる意見が面白かった． ・海外はシングルマザーにやさしいなと思った．日本以外の国のシングルマザーについてわかった．発表内容がよかった． ・余り知られていない問題をディスカッションしたので興味深かった． ・韓国にも似ている問題があるので共感できた．
	整形についてどう思うか．	・この問題は美意識や色々な社会トラブルとつながる． ・最近整形が流行っているので，色々な意見が出た． ・国や文化と言うより，個人によって意見が変わるテーマだった． ・色々な国の整形についてどう思うかを聞けて面白かった． ・自分の恋人が整形したらなど，とても身近にテーマを感じた．
3位	これから流行りそうな民族衣装ファッションとは．	・他の国の民族衣装について知ることができた． ・民族衣装をアレンジして現代風に着ることもあるなどわかった． ・ディスカッションしにくいテーマだと思ったが，意外に面白かった． ・これから流行りそうな民族衣装を考えるのが楽しかった． ・数少ない楽なテーマで，けっこう楽しかった．
	代理出産を認めるべきか．	・代理出産について知らなかったので，印象深かった． ・1人しかいない座長グループだったが，よく頑張っていた． ・とても難しいテーマだったが，意見交換ができていい機会になった． ・全てのテーマの中でとても難しい（賛成か反対か決めるのも）テーマだった．

6. 考察

本授業を通して，次の授業目標，即ち，i)異文化の視点を尊重できるようになる，ⅱ)日本社会と日本文化について異文化の視点で物事を理解し考えられるようになる，ⅲ)日本社会と日本文化について観察力を磨き，自分の考えをまとめて発表する能力を養う，ⅳ)日本人学生と留学生がディスカッションを通して交流を図る，という 4 点はほぼ達成できていた(5.1 参照)．日頃，大学生活の中で日本人学生と留学生が接する機会があまりないため，様々なテーマについて考え，自分の意見を述べ合うことは，相互にとって異文化理解を学ぶ貴重な機会となった．

日本人学生は，日本語でディスカッションできるまで，留学生が日本語能力を持っていることは当初想定していなかったと，感想を述べ合っていた．また，日本人学生は，留学生の積極性，異文化に基づく考えや意見に大きく刺激を受けた様子がうかがわれた．ディスカッションを進める中で，留学生の方が日本人学生より積極的に主張している光景が多く見受けられ，グループ内の進行やパワーポイントでの結論をまとめる際にも積極的に関わっていた．

留学生は，国際交流センターの日本語上級レベルの授業ではあるが，日本人学生と日本語でディスカションを通して，日本語の会話能力ばかりでなく，ディスカッションの技術も養うことができたとの感想も多かった．その一方で，日本人学生と議論するためには，リスニングはじめ日本語の総合力を一層高める必要があり，特に日本語を論理的に話す表現方法を学びたいという声もあった．確かに留学生の論理的表現力の指導はレポートを書く授業でしか行われていないのが現状である．

ディスカッションテーマについても，毎回ディスカッションにふさわしい内容ばかりだった．5.5 にもあるように，タトゥーに関する問題では，留学生自身が日本の温泉等で自らのタトゥーで日本の温泉に入れなかったという体験をした留学生もいて，東洋と西洋とで文化や見解が異なる点を真剣に議論する姿が見られた．議論する際に難しい社会的なテーマよりも，誰でもディスカッションに積極的に入っていけるテーマが議論しやすいこともわかった．また，日本独特の現代日本の社会と文化を表すテーマとして，座長グループが取り上げたテーマ（「なぜシングルマザーの生活は厳しいのか」「日本の特別な愛の形について」など)，日本に留学してはじめてわかったことや関心を持ったことなどについて，留学生にとって興味深いテーマが議論された．

授業運営については，毎回ディスカッションを行うグループメンバーが異なること，授業の進め方を理解するための 2 回の模擬授業，座長グループによるテーマ設定や進行方法についても適切だったことがわかった．座長グループが当日最後に行うディスカッションの順位付け評価については，評価基準が曖昧だという懸念があったが，結果よりもグループでディスカッションを行って結論を出していく過程の方に意義があるとの意見も多かった．

一方，良い結果を出せたグループを見ると，毎回特定の参加者が入っている場合が多かった．それらの特定の参加者とは，日本人学生や留学生を問わず，論理的思考ができ自己の理論を他者に説得し，グループ内で結論を出すまでに理論構築ができる学生だった．このような観察を通して，理論的思考力の育成も大学で重要であると実感せざるをえなかった．野畑他（2009）によれば「短い研修期間の中の一つの科目によって論理的思考力・論理的表現力が高められていくのではなく，プログラム・デザイン上の工夫や他科目との連携によって養成されていく」と指摘している．ディスカッション授業を行う上で，背景的知識をいかに身に付けるかプログラム・デザインも視野に入れた指導も今後検討する必要があると考えられる．

以上，ディスカッションの授業を通して日本文化と日本社会について理解を深め，将来価値観の異なるグローバル社会の中においても協力し合って 1 つのことを解決していこうとする姿勢が身に付けられ，異文化理解の授業として意義ある授業を展開できた．しかしながら，16 週という短い授業期間においては，特に留学生の日本語による論理的表現力については十分な指導ができなかった．さらに，本授業の展開には，留学生と日本人学生の双方にとって論理的思考力の育成とディスカッションを行う上で様々な背景知識が必要であることも指摘できた．理論構築の背景として，留学生は日本語の授業だけではなく，より一層の学部等の他科目との連携も必要だと考えられる．留学生がいかに論理的思考力や論理的表現力を育成するかについては，今後の課題としたい．

7. おわりに

近年留学生がますます増加する中，留学生は帰国しても日本と関係のある仕事に携わることも多く，一方，日本人学生も就職後に海外業務に携わることが多い．今後も，日本文化と日本社会について理解を深め，将来価値観の異なるグローバル社会の中においても協力し合って 1 つのことを解決していこうとする姿勢の育成を目指したい．そして，本授業で見出された課題即ち論理的思考力や論理的表現力をどのように育成するか，他教科との連携をいかに図るかを検討し，日本人学生と留学生双方の異文化理解に関わる授業を大きく展開していきたい．

注

１．Kuwana English Club(2017)の「ディスカッションの進め方」が，一般的な注意点として司会者の役割やディスカッション参加者の心構えがわかりやすく紹介されていたため参考にした．本授業の目的に沿って一部書き換え，参加者にディスカッションに参加する上での心構えや注意点について確認し指導を行った．

参考文献

一般財団法人日本総合研究所海外における食文化の戦略的調査検討会（2015）「日本食・食文化魅力発信プロジェクト－海外における食文化の戦略的調査－」（農林水産省食料産業局食品小売サービス課外食産業室調査委託事業）（http://www.jri.or.jp/research/pdf/150421.pdf）（2017年10月2日）

Kuwana English Club（2017）『ディスカッションの進め方』(http://www.geocities.co.jp/CollegeLife-Club/5117/page006.html)(2017年10月2日)

杉原由美（2005）「留学生・日本人大学生混成クラスのディスカッションにおける相互行為」『言語文化と日本語教育』30号,56-59.

徳井厚子（1997）「異文化理解教育としての日本事情の可能性－多文化クラスにおける「ディスカッション」（相交流型討論）の試み－」『日本語教育』92号,200-211.

日本テレビ(2015)「世界一受けたい授業－外国人が好きな日本の食べ物ランキング（2015年1月10日放送）」(http://matome.naver.jp/odai/2142123953661789201)(2017年10月2日)

日本貿易振興機構（2013）「日本食品に対する海外消費者意識アンケート調査」(http://www.bizcompass.jp/original/re-trend-028-4.html)（2017年10月2日）

野畑理佳・和泉元千春・川嶋恵子（2009）「論理的表現力を目指したディスカッションクラスの試み－初中級レベルを対象としたアカデミック・ジャパニーズ指導実践－」WEB版『日本語教育実践研究フォーラム報告』(http://www.nkg.or.jp/pdf/jissenhokoku/RT-Cnohata.pdf)(2017年11月30日)

花見槇子(2006)『大学生と国際交流：四人のライフストーリー』，ナカニシヤ出版

正宗鈴香（1999）「異文化間教育の視点からの言語運用教育：Situational Functional Japaneseの特性とコミュニケーション能力育成」『筑波大学留学生センター日本語教育論集』(14)，95‐108.

三重大学津波避難基本計画（2012）「三重大学危機管理マニュアル概要版自然災害対応編」(http://www.mie-u.ac.jp/bosai/201604_kikikanrimanyual.pdf)(2017年10月2日)

三重大学邦楽部（2012）「三重大学邦楽部地震避難マニュアル」(http://hougakubu00.blog130.fc2.com/blog-entry-96.html)（2017年10月2日）

有限会社 国大協サービス（2014）「国立大学リスクマネジメント情報－図上と実動による防災訓練の実施(http://www.hsc.okayama-u.ac.jp/mdps/files/files_1414.pdf)（2017年10月2日）

SUMMARY

This paper is a practical report of “Lecture Course in Understanding Japan (Liberal Arts and Sciences)” with the topic “Japanese Culture and Society for International and Japanese Students” conducted in the Spring Semester of 2016 & 2017.

University students and international students cultivated cross-cultural understanding and cultural exchange through discussion classes based on various themes drawn from Japanese culture and Japanese society.

Japanese students and international students have few opportunities to express their opinions on a daily basis in college life. Through these classes they had an opportunity to exchange ideas and opinions on both Japanese culture and Japanese society, which was very good for building mutual understanding.

KEYWORDS：Discussion, Cross-cultural Understanding, Japanese Students, International Students, Japanese Culture and Japanese Society

---

†Masako FUKUOKA*：Cross-Cultural Understanding between Japanese University Students and International Students through Discussion Classes

* Organization for the Development of Higher Education and Regional Human Resources, Mie University1577 Kurima-machiyachou Tsushi,Mie,514-8507 Japan

(2017.10.26 受付，2017.12.28 受理)